

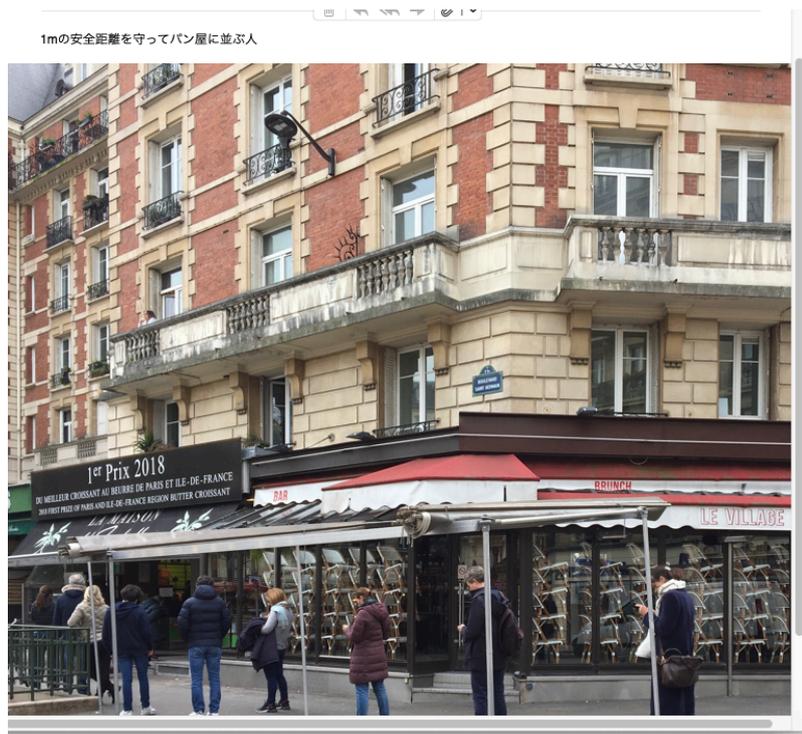
パリ通信を先行して掲載します。

3月15日(日)、うららかな春の日差し、雲一つない抜けるような青空、南フランスの田舎村は梅やボケの花、レンギョウ、桜が満開だった。コロナウイルス感染が拡大しつつあるのが嘘のようなのどかな風景だが、カフェもレストランも閉まっている。仕方なく、広々とした公園で春風に吹かれてのサンドイッチ、それはそれで気持ちの良いお昼だった。閉店違反を取り締まる警官の姿があるだけで、旅行者は帰宅を急ぐように勧告された。フランスもいよいよ外出禁止令がでるという情報を得て、予定を早めて急遽パリに戻った。

16日(月)20時、マクロン大統領のテレビ演説があり、翌17日から15日間の外出制限令が告げられた。フランスの人口6700万中3500万人が見たテレビ演説である。2週間の外出禁止の他、EU共同決定としてEUおよびシェンゲン圏の入国閉鎖、EU圏外国からの渡航禁止(30日間)、企業への経済的な特別対応などが発表された。演説の中でマクロン大統領は何度も何度も「我々は戦時下である」と繰り返した。コロナウイルスという見えない敵と闘う戦争である。

中国、韓国、日本での広がりを見てきたフランス人だが、コロナウイルスは対岸の火事という感が否めなかった。イタリアの全国閉鎖のニュースにも危機感はさほどなかった状況から、突然、爆発的に感染者が拡大した。18日の数字で感染者数7730、死者175。イタリアを追いかけるように数字はうなぎ登り、特にアルザス・ロレーヌ地方の病院がパンク状態で、軍の野戦病院設置が始まった。

最前線で治療にあたる医師、看護



1m間隔で買い物する行列

師、介護士、医療関係者の闘いは確かに戦争状態だ。私たち一般市民にできることは、彼らの負担を少しでも軽くするために、人に会わない、動かない、自粛生活を送ることだ。彼らに医療マスク、保護メガネ、防菌着などの必需品が届くように、無責任な買占めや無責任な行動はしないことである。

感染の危機を負いながらCOVID-19と格闘している医療関係者に感謝と応援の意味を込めた行為が自然発生的に起こっている。イタリアに始まり、フランスでも20時になるとベランダや窓から拍手を送る。外出禁止でも、誰にでもできる医療関係者への敬意である。感染拡大がいつまで続くか分からないが、一日も早く自由な日常生活を取り戻すために、一人一人が自分に何ができるか、何をすべきかを考えたい。

4月末まで日本からフランスへの入国が禁止された。例年はフランス語研修や卒業旅行にやって来る日本の学生さんたちをサポートしているが、現状では中止せざるを得ない。すでに到着していた学生さん達には、予定を早めて帰国していただいた。

フランス国内も停止状態に突入した。人に会わない、どうしても会う必要がある場合は最低1mの距離を保つことを徹底しなければならない。2018年2月セーヌ川増水で沈んだ「アジュール・フロタン」号の浮上工事も保留である。2月21日付けで文化省の工事許可を得て、パリ河川局の工事許可内定も得て、近隣の船主さん会議を予定していたが延期せざるを得ない。幸か不幸か、現在セーヌ川の水位が高く、すぐに着工はできない。3月9日(月) 4,19mのピークに達し、低い岸には水が溢れた。通常より2mほど高い水位だが、「アジュール・フロタン」号が沈んだ2018年2月の5,88mには程遠く、大きな心配はない。今冬は記録的な暖冬で、上流の雨量も多く、浮上工事ができるには最低でも1-2ヶ月はかかるだろう。水が引くのを待つしかない。

外出禁止は個人の自由や収入を奪うが、その理由に納得し、受け入れることを選んだら気分が前向きになった。物は不足していない、スーパーにも行ける、パン屋さんにも行ける、自宅周囲の散歩もできる。人に会わなければ、コロナ菌をうつされることもうつすこともない。家でじっとしていることが人の為になることはそうないと思う。まずは2週間の外出禁止が感染拡大にブレーキをかける成果に繋がることを願う。おそらく多くのフランス人の思いも同じで、覚悟を決めて自粛生活を送っている。



3月15日の南フランス
文・写真はいずれも古賀順子さん